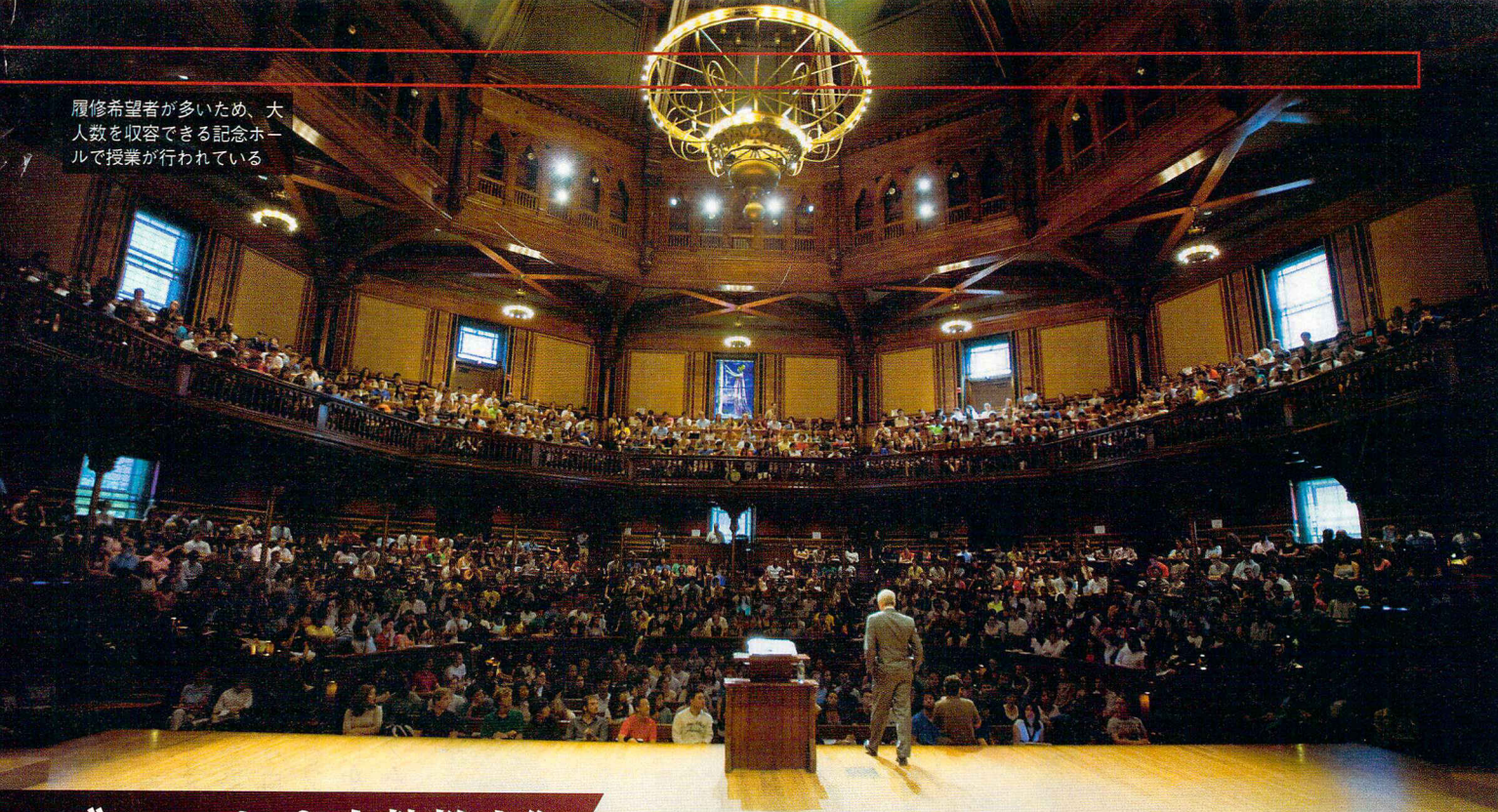


履修希望者が多いため、大人数を収容できる記念ホールで授業が行われている



“ハーバード白熱教室”

迫力の授業を誌上で再現!!

1 000人もの学生を相手にして、よどみなく議論を仕切っていく——。マイケル・サンデル教授の迫力の授業「正義(justice)」はNHKでたびたび放送されているが、まだその迫力を体験していない読者も多いだろう。そこで、サンデル教授の了解の下、授業の一部を誌上で再現してみた。

白人と有色人種が真つ向から対立

「アフアーマティブアクション」(積極的優遇措置)の是非について議論する授業は、白人の生徒と有色人種の生徒が完全に真つ二つに割れての激論になった。

サンデル教授は議論の題材として、まず具体例を出す。「テキサス州では成績だけでなく人口バランスを配慮して少数民族を優先的に合格させる措置を行っている。白人のシエリル・ホプウッドは試験の成績は悪くなかったのにテキサス大学ロースクールに入学できなかったのは不当と主張し、訴訟を起こした」。

法律論には立ち入らず、すぐに学生に問いかける。「ホプウッドの事例を正義(justice)と道徳(morality)の観点から考えてみよう。さてテキサス大学の措置は正当か。それともホプウッドの権利は侵害されたのか」。学生に挙手を促す。

ここから学生の意見を聞いていく。白人女性のブリーは「テストの点数は努力で上げられるが、自らの人種を変えることはできない」とホプウッドを擁護。黒人女性のアニーシャは「高校までの教育環境に格差がある以上、テストの点数だけではなく潜在能力なども考慮するのは当然」と反論する。

アジア系男性のデイビッドは「第一に大学教育の多様性のために必要。第二に過去の奴隷制に対する補償の意味もあり、暫定的な措置としてアフリカ系アメリカ人を優遇するのは妥当だ」と発言。これに対し白人女性のケイトは「過去の出来事と現在の出来事とは関係がない。差別はつねに誤りだ」と反論する。

続いて黒人男性のモンソアが「奴隷制度という過去の不正義のために、今日貧困に苦しむアフリカ系アメリカ人は多い。200年前の奴隷制度ゆえに今日、自分たちは人種に基づく不正義に苦しんでいる」と発言。ケイトは「格差は確かに存在する。でも、その格差を是正する解決法は、試験結果を恣意的に変えることではない」と言う。

議論は膠着するのか——。そんな雰囲気覆したのが最前列に座る長髪の黒人女性、ハンナだ。

「白人はこの国で独自のアフアーマティブアクションを400年以上

も行ってきた。それは、縁故主義 (nepotism) とかお互いさま (quid pro quo) などと呼ばれているものだ。黒人に対する不正義と差別を是正する措置に、いったい何のやましさがあるの？」

ハンナの軽妙な語り口も手伝ってか、会場は男子生徒の歓声と拍手。ここでサンデル教授は「同じ趣旨で家系基準 (legacy admission) に言及してもよかったと思うが？」と促す。家系基準とは、両親が在籍していた大学に出席した場合には、その出願者に入学優先権を与えるというルール。ハンナは、これも確かに、一種のアファーマティブアクションだとなす。

白人女性性のダニエルが反論する。「もし過去の不正義への補償であるなら、米国で歴史上差別されなかった民族までもがその利益を享受していることをどう説明するのか。さらに言えば、アファーマティブアクションは人種差別をなくす目的を達成するどころか、逆に人種間の軋轢を増幅している」

ハンナは臆することなく言い返す。「私の意見は違う。当大学のよきな組織で多様性を高めることは、学生全体の教育に寄与する。特に、白人が住民のほとんどを占める地域で育ち、世の中を知らない白人学生に教育に」。ダニエルも譲らない。

「人種は多様性と同義語ではない。多様性を実現するには、ほかに多くの手法がある。しかも、人種に関する政策を行えばその人間を変えられるとどうして断言できるのか。繰り返すが、軋轢を増幅するだけだ」。ハンナは「今あなたが述べたとおり、多様性にはさまざまな種類がある。が、人種的多様性がその範疇から除外されるいわれはない」。

この激論に割って入ったのが人のよさそうな白人男性のテッド。「この国では人種差別は違法だ。マーティン・ルーサー・キングは肌の色で判断されるのではなく、その人自身の人格、長所、功績によって判断されるべきと言った。そうであるならば、人を人種のみに基づいて判定するのはアンフェアだ」。

この後はアジア系女性性のダーが発

“日本の存在感”が低下するハーバード

サンデル教授の授業「正義」は主に学部1年生が受講する基礎クラス。ハーバードでは学生が講義の満足度を採点するシステムがあるが、「正義」の08年秋チーム (09年秋は休講) の学生からの評価は、大教室授業では異例の5点満点中3.99点。しかし、上には上がいる。09年秋のベスト講義に選ばれたのは4.38点の政治学のスティブン・リビツキー教授だ。

一流の教授と意欲にあふれる学生たち、こんな授業が受きたい——。NHKの「ハーバード白熱教室」を見てそう思った人は多いだろう。超難関と思われがちなハーバード大学だが、入試では成績以外に部活動やボランティア活動が重視されるうえ、奨学金制度の充実で学費の負担も日本より少ない。世帯年収が8万ドル以下の場合学費のみならず渡航費、寮費までほとんどタダだ。それでも、日本から留学する学生は年に1~2名。昨年学部に入学生約1800人のうち日本人は一橋大学から転籍

した小林亮介君だけだ。小林君は「ハーバードはインターンでも何でも無限の可能性がある大学。難しいというイメージばかりが先行していてもったいない」と、夏休みを利用して日本の高校生に米国留学をPRする課外活動を行っている。

ハーバードでは約7000人の学生の約1割を外国人枠にしているが、インドや中国からの学生が増えている。これまでは比較的日本人が多かったビジネススクールもピーク時の半分で、ここ数年は1学年10名程度だ。ビジネススクールの日本リサーチ・センターの佐藤信雄センター長は「学生数の減少のみならず日本自体への関心が低くなっている。授業に日本の事例を取り上げてもらうのも難しい」とこぼす。「教授陣の関心はなぜトヨタが挫折したのか、などネガティブなものばかり。一方でインドや中国の企業のCEOに会いたいという要望は非常に強い」。経済の勢いの差は、こんなところにも影響を与えている。

言。さらにサンデル教授がテッドに対していくつか質問をしたところで、まとめに入っていく。

自説を押し付けずに 授業を締めくくる

「擁護派の論拠は三つあった。教育上の格差や不利益で生ずる結果を調整するという是正論 (corrective argument)。歴史上の不正義を正す補償論 (compensatory argument)。多様性論 (diversity argument) だ」。

サンデル教授は、このうち多様性論は誰もが便益を得るため採用しやすいと言いつつ、ハーバード大学が多様性を重視する方針であることも紹介する。そして、「そもそもホプウツドの権利は侵害されたのか」と問う。「いや侵されていない。ホプウツドにはそれを主張する権利はないし、誰にもない」。

最後は次のように締めくくる。「アファーマティブアクションをめぐる議論、特に多様性をめぐる議論は、権利に関する議論になり、さらには道徳的対価 (moral desert) は正義を実現する基礎か否かの議論にもつながっていく」。サンデル教授は、正義と道徳は切り離せないと考えている。授業にはその哲学が色濃く出てくるが、自説を学生に押し付けるようなことはしない。そこに、人気の秘密があるのだろう。